

熊本地震から1年半：地震と分析機器



戸 田 敬

熊本地震から1年半が過ぎました。ブルーシートでおおわれた家々はほとんど見なくなりましたが、更地の続く地域が多くなりました。そんな中建築中の住宅もよく見かけるこの頃です。さて、昨年度は日本分析化学会をはじめ様々な方々から暖かいお言葉や配慮あるご支援をいただきました。まずはお礼申し上げます。

熊本市内でも震度6強の地震に2度見舞われました。一度目はロシアでのフィールド調査から深夜便を乗り継いで帰国した翌日の夜で、久しぶりにゆっくり寝られると思っていた矢先でした。台所の妻はあわてて立ち上がったので、そのまま机の下に潜り込むとばかり思っていたところ、食器棚の前に立ちはだかりガラス扉を押さえて食器がなだれ落ちるのを必死に防いでおり、私も思わずその列に参加しました。家族の無事を確認した後はあわてて研究室に向かいました。校舎の外には研究室に居残っていた学生が大勢避難していました。そんな中、校舎の実験室に潜り込み、倒れそうな装置やパソコンを横に寝かせて回りました。質量分析などの真空機器については、ターボ分子ポンプを停止させ電源を切ってまわりました。まだ大きな余震が続いており、大型の冷蔵庫が倒れたりして、一人での作業には恐怖も感じました。翌日、来てくれた学生たちと散在した器具の片づけや、余震に備えて装置の配置を整えたりしました。このことは、後で思えばかなり有効でした。その深夜、後に「本震」と呼ばれる地震が起こりました。このときはさすがに生きた心地がしませんでした。停電で真っ暗な中、周りの家具がみな倒れてきました。長い揺れのあとようやく外に逃れましたが、さすがに研究室の様子を見に行く気力はありませんでした。

週明けの月曜から玄関横の教室につくった理学部の対策本部に詰めることになり、自分の部屋や研究室の復旧にかかれぬ毎日が続きました。そんな中、ある分析機器メーカーさんから社長さん名義でお見舞いの書状をいただきました。ほとんどの分析装置が止まったままになっており、また、手を付ける余裕もなかった頃だったので心強く感じました。そのうちにいくつものメーカーさんが来られるようになりました。サービスの方を派遣され、大学中の装置の動作確認を行っていただいたところもありました。私たちの仕事は、分析装置に依存するところが大きく、本当にありがたく感じました。分析機器メーカーと研究者は単に販売元と顧客という関係ではなく、相互に強く依存し合った関係だと実感しました。特に分析化学会に所属する研究者・技術者には強く言えるのではないのでしょうか。本学会はユーザーやメーカーがともに所属している有意義な学会であり、分析に^{かか}関わる先端研究の推進とともに分析機器産業や分析を駆使する事業の活性化双方でメリットを享受していけば、益々の発展が望まれると思います。また、設備や分析機器は、万が一に備えた設置や管理を怠らないことの重要性も学びました。

[Kei TODA, 熊本大学, 日本分析化学会九州支部長]